ささえあう

2012年 9月15日 第**17号**

事務局 大分市大字森679-6 リフォーム夢舎内 TE・・FAX097-527-5443

ネットワーク7年目の活動に!

大分精神障害者就労推進ネットワークの取り 組みは7年目に入りました。これも皆様の温か いご協力があればこそと心から感謝いたしてお ります。

最初は手探りのスタートでした。厚生労働省 委託のセミナーを大分で開催し、その実行委員 会のつながりを活かしたいと考え、ネットワー ク参加を呼びかけたところ、多くの皆様のご参 加で結成することができました。 ありました。

私たちはこれまで、ネットワークを通して経験を伝え合い、様々な事例を共有してきました。 うまくいったことも、うまくいかなかったこと も、伝え合いながら、悩みも話し合ってきました。

「こうすればいいのではないか」、「こうしたらうまくいった」一お互いの経験を通したアドバイスが、私たちの取り組みをこれまで支えてくれました。

連携から未来が見えてくる

大分精神障害者就労推進ネットワーク代表 藤波 志郎

成果は人のつながりと「働ける」実感

これまでの6年間、着実に取り組み、確かな 成果を上げてきたと実感しています。

それは、精神障がいがある人も適切な支援を 受けることによって就労できるという実感であ り、職場や職種を超えた人のつながりであり、 行政との連携と協力の積み上げでもありまし た。

私たちは様々な連携を活かしながら、地域で 一人ひとりの皆さんが、自分に適した場所を見 つけることができるよう、支援の形をつくり、 働く場を探してきました。その結果、一歩一歩 ではありますが、働く場は広がり、就労できる 人も増えてきています。

試行錯誤と経験の交流が支えに

しかし、一方ではどうしてもうまくいかない こともあります。私自身、試行錯誤の連続でも 私たちはこれからも、事例を共有しながら、 現実に学び、現実のなかから成長していきたい と考えています。

悩みを出し合って

当事者、家族、支援者、皆さんそれぞれに悩みを抱えておられると思います。それを出し合って、話し合って、そしてまた新たな協力の形をつくっていく。そのことによって、一番の目標である当事者の皆さんの「働きたい」という思いを実現し、家族の抱える困難を少しずつでも軽くしていける地域を作っていくことができると確信しています。

地域におけるフォーラム、就労や地域生活支援の指針となるマニュアルづくりなど、私たちに求められる取り組みは山積しています。

これからも引き続いて、力を合わせてながら 取り組んでいきましょう。

大分精神障害者就労推進ネットワーク

「第七回総会」開催

大分市で80名が参加、熱心な議論

6月16日、大分市のアイネス2階大会議室で約80名が参加して開催されました。1年間の取り組みを振り返り、新年度方針を決めるとともに、「"地域連携"の可能性」をテーマに記念行事を行いました。記念行事では、三城大介副代表をコーディネーターに、「L.L.C.ハートブリッジの4年間」について衛藤淳之介理事、「地域で家族ぐるみ支援―ニーズに応える訪問看護ステーションりぼん」について、訪問看護ステーションりぼんの酒井絹恵さんが報告を行いました(報告内容は今号及び次号で紹介)。



意見交換では、「病院、相談支援事業所、訪問看護、就労支援事業所などとあるべく多くつながりたい」、「訪問看護の理解はまだ少ないが、家族の気持ちを聞いたり、つらいときの本人の気持ちを家族に伝えるなど、一人一人を大事にしなければという思いで取り組んでいる」などの声が出されました。会場からは「地域支援は市町村や県の枠を超えて必要なこともある」、「就労支援で本人の願い、家族の思いはどう反映されるのか」などの課題が提起されました。取り組みが進むことによって、さらに新たな課題が浮かび上がってくることが共通認識になった総会でした

総会で決定した新年度の方針は以下の通りです。

2012年度取り組み方針

1、就労を支える取り組み

- (1) ネットワーク及びメンバーに寄せられる支援の要請に対して、一つひとつの具体的な支援を 大事にしながら、ネットワークとして全力で支援します。
- (2) 支援にあたっては、各分野の連携と地域的な支援体制づくりに努めます。
- (3) 支援の具体例はネットワークとして共有し、その後の取り組みに生かします。

2、地域にネットワークを広げる取り組み

- (1) 地域における連携づくり、地域に対する啓発・教育、他地域との連携などのメリットを伝えながら、国東市や大分市以外でも「地区フォーラム」を開催できるよう働きかけます。
- (2) 開催にあたっては、実行委員会の設置や運営、フォーラムの内容づくりなどの手法を詳しく 伝えるとともに、それぞれの地域主導で開催できるよう支援します。

3、「地域連携マニュアル(マップ・ハンドブック)」の作成

- (1) 昨年度の取り組みを受けて、地域で精神障がい者の支援に取り組む際の基本的な考え方や具体的な方法をわかりやすく説明した「地域連携マニュアル(マップ·ハンドブック)」の作成に取り組みます。
- (2)「地域連携マニュアル」の完成に合わせて、「地域連携フォーラム」の開催を検討します。

総会「報告」第1回

「働きたい」をコーディネイト

L.L.C.ハートブリッジの4年間

L.L.C.ハートブリッジ 衛藤淳之介

企業

公的機関

主治医

家族

医療

関係者

就労支援

施設

主人公は本人

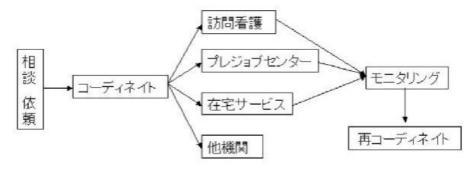
ハートブリッジは4年前、訪問看護と訪問介護事業を中心にしながら、高齢者など困っている人 たちを手助けすることをめざした事業所として大分市でスタートしました。現在は、訪問看護ステーション、プレジョブセンター(生活訓練施設・就労移行支援施設)、生活サポートステーション、訪問介護ステーションを運営しています。

精神障がいがある方の就労支援は、主に「介護」と「接客」の仕事について行っています。ハートブリッジに来所していただく方は病状も、その時持っているバックグラウンドも、来所目的もそれぞれ異なります。私たちは本人を主人公にしながら、その人にあった「個別支援」を目標にしています。その際、医療と福祉を融合した支援を重視しています。

ハートブリッジの支援の流れ

相談や依頼を受けたら、インテーク(受け入れ時の聴き取り)からアセスメント(評価と予測) までを相談員が行いサービス提案を行う。(平均3~4回)→各担当によるアセスメント(重要)。そ

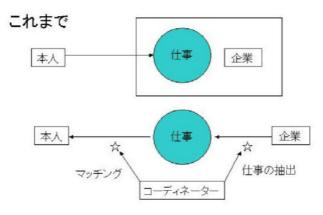
の際に、相談された方の ニーズをハートブリッジ のサービスで支援できる かを確認します。ハート ブリッジでは難しい場 合、紹介先に戻す、もし くは他の機関を提案する こともあります。



ハートブリッジの"マッチング"の方法

就労支援にあたっては本人の希望を第一にして、就きたい仕事の分野や内容等にできるだけ、近い仕事先にします。その際、「できないこと」を探すのではなく、「できること」を探します。「できること」から始めていき、本人のモチベーションや良い所を伸ばす支援が重要だと考えています。

就労にあたって、これまでのよう



に本人が直接企業に向き合うのでなく、支援するコーディネーターが関わることによって、仕事の 抽出(作り出すこと)やマッチング(結びつけること)ができるようになり、可能性が広がります。

「介護」と「接客」の仕事を中心に

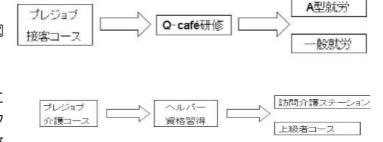
ハートブリッジが対象としている仕事は主に「介護」と「接客」です。これまでの経験で、精神 障がいの方に適性があることがわかったからです。

・接客コース

「接客」の仕事を希望する場合、右図 のようなコースで就労をめざします。

・介護コース

「介護」の仕事の場合は右図のようになります。いずれも、プレジョブセンターで訓練や研修を受けながら、実地研修を行ったり、資格習得をめざします。



Fケア

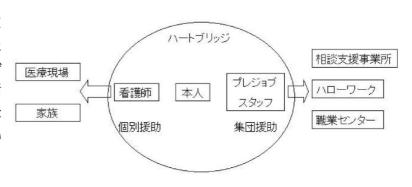
成果も反省もいっぱい-4 年間の就労支援を振り返って

ハートブリッジで研修し、一般就労に結びついた人が4年間の取り組みのなかで 12 名います。しかし、ハートブリッジの支援が合わず、他の機関に移った人もいらっしゃいます。また、途中で体調を崩し、支援を終了させていただいた人もいます。 ハートブリッジだけでは本人や家族が希望する支援を行うことは不可能だというのが、私たちの実感でもあるのです。

研修

地域でコーディネイト

その壁を乗り越えるためにはどうすればいいのでしょうか。私たちは、個々の施設や団体がそれぞれの役割や機能を共有し、利用者にその時必要な支援を地域で行なっていくことができればよりよい支援ができるのではないかと思っています。



支援機関による連携と同時に重要なのが、地域の理解です。まだまだ、地域生活の場において精神障がいや精神疾患に関しての理解は進んでいないように思われます。しかし、生活の基盤は地域です。地域での理解をどのように進めるかも重要な課題であると感じています。

今後、支援を進めていくなかで、就労等を通じ、地域さらには社会で精神障がいや精神疾患について理解に少しでも結びつくことができるのではと思っています。それにより、当事者にとって地域での生活がよりよい変化につながればと思っています。

就労のその先に目指すこと

「働く」ということは、そのこと自体がハートブリッジが目指す支援の「ゴール」ではないと思っています。「働く」ことは生活の一部だと考えます。 「働くこと」を支援することで、「自立」を支援したいと思ってます。

ハートブリッジ

就労支援キーワード集

当日の報告で紹介された「言葉」や「考え方」をまとめてみました。

就労の意味

・収入の確保 ・社会参加 ・自己実現 ・成長の場

就労支援を進めるために必要な事

体調の把握

就労において体調管理は必須である。そのため個々人の病状の把握は絶対に必要。

不安の構造化

多くの方が働くことへの不安を持っている→ひとつひとつ不安を整理し、それぞれ の不安に対してアプローチが必要である

寄り添い(「キーパーソン」の必要性)

不安を少しずつ解消していっても、新しい不安は常に存在する→その場合必要となるのが「キーパーソン」。仕事先だけでなく、いつでもどんなことでも相談に乗ってくれる人の存在は本人を非常に安心させる。

生活調整と家族調整

- ・就労と生活は表裏一体である→生活指導を含めた支援が必要。
- ・家族関係や家庭での状況が生活に大きな影響を与えることが多い。そのため、家族 を含めた支援が必要な場合がある。

本人の気持ち

- ・「働きたい」と思う気持ちは支援者からのアプローチではなかなか形成されない。
- ・自分で、「なぜ働く必要があるのか?」、「働くことで自分の何を達成するか」など、 しっかりした意識を持つことが、就労に結びつき、就労を定着することにつながる。

第7回総会のもう一つの報告、「地域で家族ぐるみ支援―ニーズに応える訪問看護ステーションりぼん」は次号に掲載します。

理事の声

河村クリニック・訪問看護ステーションひこばゆ訪問相談員 佐藤義朗(精神保健福祉士)

「精神障がい者福祉や医療のなかで、利用者から高い支持を受けている施設に共通している点は、 熱意のあるスタッフがいるところである」と、今年、北海道から来県された「べてるの家」の向谷 地さんも話されていたように、私も10年ほど働いてみてその思いは日々強くなっています。

そのようなスタッフは、仕事としてだけでなく、ライフワークにしている人でないとできないのが現状でしょう。その頑張りを継承していくことは、賛同し協力できるスタッフがいたり、育ってこそのものとなりやすいので、立ち上げまたは隆盛させたスタッフが代替わりしてしまうと、以前

のような賑わいをなくしてしまうことが多いのではないかと思います。

決められた一定のサービスを提供 し続けられることも大切なことで す。しかし、心を通わせ絆を実感し ながら安心した地域生活が送れるよ うに支援できるスタッフがいれば、 それを超越することもあるのではな いでしょうか。

まだそのような現状のなかで、先 日事故により亡くなられた先輩のP. S.W. (精神保健福祉士)も同じよ うに熱い思いを持った方でした。私 も今まで以上にそうありたいという 思いを強くしたこの頃です。 みなさんこんにちは。認知症地域支援推進員の秋 月と申します。地域包括支援センターは高齢者の 総合相談窓口として 7 年目を迎えております。認 知症の方、ご家族の方への支援を中心に城東圏域(大 分市)では「自分が認知症になっても安心して暮ら せるまち」を目指し、地域関係者や医療関係者と ネットワーク構築への取り組みをおこなっていま す。特に今年度は、認知症介護の大切な視点でも あります「その人らしさ」を尊重した認知症ケア を多職種連携にて共有できるよう努めたいと思い ます。

城東地域包括支援センター
秋月久実

大分精神障害者就労推進ネットワーク2012年度第1回理事会から

- ・精神障がいの家族会では医療関係、特に薬の話が多い。もう少し、いろんな相談支援体制の広がりや 当事者家族への声かけがあればと思う
- ・それぞれの病院のなかではいろんな取り組みがあり、当事者は支援が受けられている
- ・本人や家族から、「病院の人に言ってもいいんですか」と言われる。病院のワーカーを利用していない。
- ・医者との付き合い方も大事。
- ・地域から病院に発信していくことも必要。
- ・多職種連携が重要。モデルをつくって現状から一歩でも進んだ形をつくれれば。
- ・訪問看護ステーションで24時間、深夜も含めて対応している。
- ・病院でワーカーが十分生かされるシステムがない。
- ・緊急時の対応は、内科や外科との連携、クリニックとの連携など課題が多い。
- ・現場で支援をしていると、できないことが多いが、こういう場で話し合うことで、もう一度目を覚まして取り 組む可能性が見えてくる。

また、行政(アドバイザーとして参加)からも、「(地域支援について)具体的に第一歩としてできることは何か考えているが、見込みと結果への根拠が必要。それを示せる情報がほしい」、「県庁内の職場実習を募集している。 公文書館等で働くことになり、最長2年間働ける。精神の枠は4人になった。申し込みは8~9倍ある」などの提案や情報提供がありました。

(記録・文責編集部)

国東フォーラムin安岐(2012年5月19日·国東市)報告

「ともに生きる ともに働く」

5月19日、国東市安岐町で「第2回国東フォーラム in 安岐」が開かれました。市全体を対象にした昨年のフォーラムを今年からはより小さな地域単位で開いていこうというもので、安岐町の自治委員や民生委員、学校、ボランティアなど地域のさまざまな人たちが参加して実行委員会が結成され、昨年12月から6回の実行委員会を開いて準備してきたものです。ネットワークとしても、8月の準



備段階から約10か月間通して参加し、フォーラム成功のために全力で取り組みました。

当日は約150人が参加、愛媛県、愛南、町御荘病院の長野敏宏院長が、「山田、憩いの里温泉」など精神障がいがある人たちが地域の人たちと一緒に働き、地域を支える取り組みを紹介。急速に高齢化する地域のなかで、障がいがある人たちが高齢者とともに地域を支える重要な働き手として大きな役割を果たせることを伝えてくれました。また、安岐町で働く当事者3名、看護大学生、地域の人たちによる意見交換や、安岐町の三角ベースと地区の人たちが協力して取り組んだ竹林の見学も行われました。ケーブルテレビの活用等による住民への広報も重要な役割を果たしました。

精神障がいがある人たちが、人々の理解のもとに、地域で暮らし、地域で働き、生きがいを感じ ながら暮らす可能性を見せてくれたフォーラムでした。

「国東フォーラムin安岐」講演

「障害者福祉・地域福祉から地域振興へ」

障害をもっても地域でいきいきと暮らすために

愛媛県御荘病院院長 長野敏宏 さん

自分が誰かに必要とされるために

愛南町では「ともに生きる」「ともに働く」ことをめざしてきました。それはあらゆる地域住民が、 自分たちの住む地域のために、さまざまな垣根を取り払いながら生活し続けることだと思っていま す。そして、「働く」とは就労のみを意味しているのではなく、何か誰かのためにすること、自分が 誰かに必要とされるために必要な営みだと考えています。

最初に考えていただきたいことは、「自分が障がいを持ったらどんな人生をめざしますか?」ということです。常に「自分だったら」と考えることが大切だと思います。私は、「子どもにふるさとをつくってやりたい」と思うところからスタートしました。

高齢者も障がい者も地域をつくっていく仲間

愛南町は人口2万6千人、高齢化しています。高齢者と障がい者が支援されるだけではまちづくりは困難です。高齢者も障がい者も、ともに地域を作って行くパートナーとなることが、まちづくりに欠かせないのです。私は、障がい者を支援する活動から、障がいの有無にかかわらず、「ともに」「街づくり」を行う活動、障がい者が支援される側から「担い手」になり、「ともに」働き、稼ぎなが

ら「ともに」生きていくことを考えました。

集まることから「組織づくり」へ

まずは集まることです。つながることです。お祭りやイベントを始めました。地域コミュニティーは"向こう三軒両隣"と言います。しかし、地域の支援力を発揮するためには地域の理解(十分な啓発)が必要です。お互いに関心を持つように努め、中学生からの早期教育にも力を入れました。 思春期が病気の好発時期なので、その意味からも大切な事でした。

そして、障がい者と高齢者が地域に貢献する立場になれるよう、試行錯誤のなかから「組織」づくりへ踏み出します。そこで出会ったのが観葉植物レンタル「事業」です。NPO法人ハートinハートなんぐん市場(地域経済振興への取り組み)を立ち上げました。赤字の町営温泉を請け負って、「山出憩いの里温泉」を障がい者も一緒に働く場にして黒字化することができました。20人の障がい者が働き、5年間誰もやめていません。ここでつくる「ふるさとおせち」は毎年130食分、200万円の売り上げがあります。12月30日は徹夜で働きますが、皆頑張っています。

だれもが力を発揮できる「仕組み」づくりを

ボランティア活動には限界があります。街を本当に創っていくためには、持続可能な経済のしくみを持つ「組織」等が必要です。政治、行政に頼ったしくみでは、本当に地域に根ざしたものにはなり得ません。愛南町では今、全国に販売できるアボガド栽培に挑戦しています。「地域資源循環」を基本的な考え方に据えた地域密着型の取り組みを進めることが必要だと考えています。

誰も「世話になりたい」とは思っていません。様々な立場の住民が、皆、誰かの役にたちたいと考えています。それぞれの力が、街づくりへ最大限発揮できるような「仕組み」づくりが必要です。 役割を果たす場があること、それがいきいきと暮らすことにつながるからです。

(まとめと文責・編集部)

意見交換

働く当事者・看護学生・地域のボランティア・・・

- ●障がいをオープンにして働いている。発病20年にして病気とうまくつきあえるようになった。 洗車や備品管理、配食サービス、集金などいろんな仕事をしている。
- ●人の視線が怖くて帽子をかぶっていた。今は人の痛みや苦しみがわかる人間になりたい。ピアカウンセラーになってつらい人の話を聞きたい。
- ●竹林で6,000本を500本に整備する仕事をした。させられる労働より頼られる仕事がうれしい。 施設長の片腕になりたいと思っている。
- ●訪問看護の実習で自分の弱さ小ささを知った。できることはごくわずか。お節介をしない、気負わない、そして障がい者が地域で暮らせることを信じ、"大丈夫明日まで生きていてね"と伝えること。
- ●限界集落で80代の人が一番多い。障がいのある子が一緒に働いてくれた。はいといいえしか言えない子だったが、おばちゃんが大きな声でほめていた。達成感を味わうことの大切さがわかった。(以上、国東フォーラム in 安岐より)

編集後記 ネットワークの6年間は、必ずしも順風満帆の時間だけではありませんでした。その困難さは、何よりも支援そのものの難しさによるものでしょう。「一人の人を支援する」ことの重さです。そして精神障がいがある人とその家族がおかれた現状の重さも関わってきます。それでも「確実に変わってきている」、「変わり始めている」というのがみんなの共通する思いになりました。ネットワークの推進力は、支援を必要とする人を第一に思い浮かべながらの意見と情報の交換です。もっと議論を、そして行動を。(O)